

写真-1

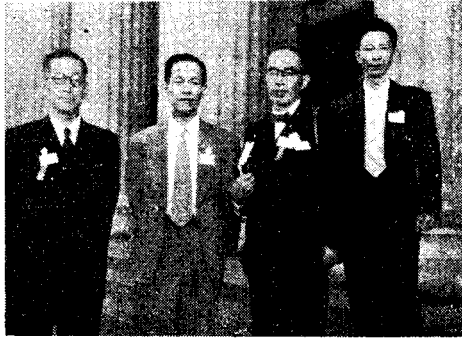


写真-2



写真-3

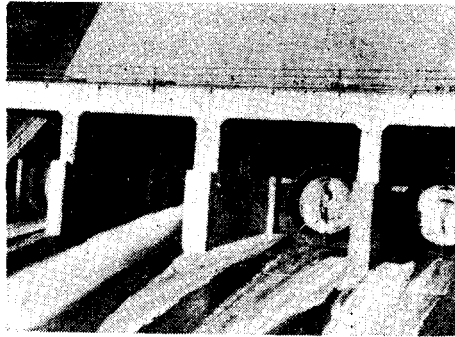


写真-4



独立日本の土木技術者に望む

正員 三浦 義男*

私は一昨年5月土木学会通常総会において会長講演として所信を申し述べたことがあります。独立後1年を経た今日再びこれを強調したいと思います。すなわちわが国における諸施設の現状を見て、まず第一に土木の構造物は永久的構造物でなければならない、特に資源の乏しいわが国では設計及び施工に当り一層寿命の長い構造物を造ることに努力せねばなりません。

第二にこれが保守管理については技術的に検討しなければ、せつかく造られた構造物の保守が充分でないため荒廃したり寿命を縮めることになるから保守技術を重要な課題とし一つの体系を確立せねばならない。

第三に土木工事の施工はより高く科学的でなければならない、すなわち工事示方書、請負契約書等いづれ

* 前会長、交通協力会会長

も註文主施工者双方ともに個人的裁量の余地ができるだけ少ない科学的で理論的なもので、さらに双方がこれを忠実に守つて立派な建造物を造る慣習を樹立しなければなりません。

第四に事業の計画は、総合的な配慮が必要であります。少し大がかりな事業は各方面と関連接触を生じますから、二重投資とならないように慎重に考慮しそして投資するからには最も有効に効果を發揮する計画を樹てなければなりません。各地で総合開発計画が進められていることは真に喜ばしい次第であります。この点各官庁の所管関係、中央地方の権限関係等の問題がありましても土木技術者の公正な判断と良識でもつて解決されねばならないと信じます。

道路、港湾、鉄道、都市等ようやく終戦時の荒廃状

態を脱し、鉄道の新線建設とか電源開発のごとき積極的な建設事業も各地に起つてきました。これにはまだ問題が多く残されています。一層国土開発を進め国民生活の向上に努力せねばなりません。

ことに人類の福祉増進を信条とするわれわれ土木技術者にとつていまこそ重大決心をもつて、これに応えなければならぬと同時に全国民にわれわれの覚悟を反映せしめなければならぬと信じます。

経済安定本部のときのこと

正 貞 小 沢 久 太 郎*

私が経済審議庁の前身の経済安定本部に入つたのは昭和25年5月だつたから、もう3年前のことになる。当時は経本の建設交通局で公共事業予算の取りまとめをやつていたので、局全体としても非常に活気があつたし、私もずいぶん忙しい次第だつた。予算というのは要求する方よりも査定する方がずっと切ないし、また良心的にやろうとすればむづかしいものだということがしみじみとわかつたような気がする。しかしともかく私達技術者が何とかして技術者なりに筋の通つた予算を作つてみようと思つて一生懸命にやつてみたつもりである。

予算はだんだん締め上げられてくるとやはり枠が問題になる。つまり河川につく金がいくらか、道路につく金がいくらか、あるいは農業、山林、漁港等々にいくらかといった総枠が結局一番ピンとくる数字になつてしまう。そこでそのウエイトや前年に対する伸びや何かでその事業のその時々における重点順位が評価されたような形になるのだが、私はこの点で一番閉口した。河川が大切か漁港が大切か都市計画が大切かというのはちょうど塩の辛さと砂糖の甘さを比較しろというようなものだ。予算というのはそのような形できめられるべきではなく、やはり一つ一つの事業を積み上げて、お互いの組み合わせり方、関連し合い方をしっかり見きわめ、その総和としての結果が例えば河川として締めくくればこうなつたというようにまとめられるべきなのだと思う。

一番大切なのは一つの地域、流域といったものを総合的にどういうふうによつてゆくかという根本方針と具体的な案をしつかり作つてゆくことである。なぜならば自然というものは一体性を具えているし、そこに住んでいるのも要するに同じ人間同志に過ぎない。すべてはお互いに関連し合つている。それを河川とか農業とかいう断面でたち切つてみて、それぞれの予算をそれぞれで要求する。そして枠についてだけ特に議論が集中されるというのは本末顛倒ではないかと思うのだ。

私が総合開発の問題を特に一生懸命になつて取りあげたのは、こうした筋金を公共事業予算の編成にも入れてゆきたいと考えたからにはほかならない。私の気持はまず完全な全国にわたる開発計画の構想を画いてみる。そのうちの特に重要な地域としての特定地域をそこに浮かび上らせるということだつた。それを実現してゆく過程においてむしろ順序が逆になつて特定地域の方から先に問題が展開しているが、しかし、このようなものをさらに推進してゆく大きな背景として国土の総合開発の考え方はまたはつきりと画く努力をしなければならぬし、またそのようにしてこそ私達技術者の正しい考え方はだんだんと力強く稔つてゆくと思うのである。

いま私はそろそろ生涯の一つの決算期に入つているという気がするのだが、今後ともこのような技術者の正しい意見を盛り立て、主張してゆくことには是非とも尽したいと考えている。

* 前経済審議庁審議官